広告　企画・制作／読売新聞社広告局







70th anniversary

京都外国語大学 学園創立70周年記念国際平和シンポジウム

戦後70年の日本の平和、歴史の記憶と和解

――日米同盟の変容と東アジアの国際秩序

京都外国語大学（京都市右京区）で7月19日、学園創立70周年記念国際平和シンポジウムが開催された。「PAX MUNDI PER LINGUAS（言語を通して世界の平和を）」という理念を持つ同大学が、日米同盟や東アジア諸国との関係について学生たちと考える機会を設けたもので、「戦後70年の日本の平和、歴史の記憶と和解」と題して米フロリダ州立大学戦争研究所の研究者らを招き、京都外国語大学・菅英輝客員教授とともに平和国家としての日本の今後のあり方を展望した。

The Great Divergence: Trans-Pacific Memories of the Second World War

大いなる分岐：環太平洋地域における第二次世界大戦の記憶



講演 ①

カート・ピーラー 博士
フロリダ州立大学
Institute on World War II and the Human Experience, Director, Associate Professor of History

1990年代初め、アメリカ人の中で、太平洋戦争の記憶は非常に強いものでした。しかし今、その記憶は薄れてきています。オバマ前大統領はアリゾナ記念館を訪れましたが、真珠湾攻撃75周年の記念式典には出席していません。この1941年12月7日の出来事を個人的に覚えている人はあまり残っていないと思います。もちろん、全ての戦争が忘れられているわけではなく、例えば南北戦争は人々の記憶に今も残り続けています。太平洋戦争の記憶が薄れるのは、単に時間がたったということだけではありません。この戦争が、慈悲のない戦い、ルールのない戦いだったからだと言えます。

88年、レーガン大統領は、日系アメリカ人が強制収容所に入れられたことに対して正式に謝罪し、賠償金を支払いました。多くの日系アメリカ人や歴史家たちの協力で、日本人に対する考え方も変わってきました。アメリカ人たちは戦争を意識的に忘れようとし、兵士に対する尊敬の念を強調することで、それが彼らの中での戦争の記憶となるように努力しています。「トラ・トラ・トラ！」「硫黄島からの手紙」などの映画や小説では、敵であっても人間性を強調し、共感を持てるように描かれています。退役軍人でもまだ深い敵対心をもっていますが、その人たちの中には、日本に対してまだ同じくらいの市民が持っている人たちもいますが、太平洋戦争の記憶を新しいイメージで捉えようとし始めています。

第2次世界大戦中は、言葉にし尽くせない破壊があり、兵士と同じくらいの市民が命を落としました。また、いまだに日本とロシアで平和条約は締結されていませんし、一時的だと思われた朝鮮半島の分断は継続しています。戦争の代償は非常に大きいということを決して忘れてはいけません。

Reflections Upon Japan's Role in Proactively Promoting Peace

積極的な平和推進における日本の役割に関する省察



講演 ②

アニカ・カルヴァー 博士
フロリダ州立大学
Institute on World War II and the Human Experience, Faculty Fellow, Associate Professor of East Asian History

昨年の内閣府の調査では、日本人の8割以上がアメリカに親近感を持ち、関係が良好だと考えているという結果が出ています。また、来日するアメリカ人も多く、アメリカはアジア諸国以外で日本への留学生送り出し国のトップ10に入る唯一の国です。なぜ彼らが日本で勉強したいかというと、日本がクールだからです。今のアメリカ人学生は、日本のイメージとして、パールハーバーよりもクールジャパンを思い出すようです。1980年以降のアメリカでは、アニメなど日本のポピュラーカルチャーの消費が意欲的に行われています。日本政府も海外の旺盛な需要を経済成長につなげるべく、PRに力を入れています。こうしたソフトパワーの推進は、ナショナルブランドの確立に役立つと考えられています。

日本は今、今世紀の安全保障についてもっと積極的な役割を果たそうとしています。東アジアの脅威に対して再軍備する日本なのか、クールジャパンなのか、振り子のように揺れ動いている状態です。私は、日本には平和のための施策を確立するリーダーシップをとってほしいと思います。日本は唯一の被爆国です。一般市民が巻き込まれた戦争について、心の底から話ができるのではないでしょうか。こうした経験を踏まえた外交を進めるべきだと思います。

皆さんは世界の歴史の中で、面白い時代に生きています。スマートフォンが常にインターネットにつながり、瞬時に世界の出来事を知ることができます。SNSなどのコミュニケーションツールで、一人の人間として発言権を持てるようになっています。将来の平和は皆さんの手にあります。この大学でリベラルアーツと言語研究を通して平和的な国際主義をグローバルに学び、世界に出て、積極的に平和のメッセージを発信してください。

Challengers to the 'Postwar Regime' and the 'History Problem' in the Asia-Pacific

戦後レジームへの挑戦者とアジア太平洋の歴史問題



講演 ③

菅 英輝 博士
京都外国語大学客員教授

戦後の日本は、社会的、文化的に、そして外国との関係において大きな変化を遂げました。特に重要なのが、日本が平和国家として自らを再構築したということです。それがなければ日本の人々は今日の豊かさを享受することはできなかったでしょう。一方で、今の日本は、いわゆる「戦後レジーム」に直面しています。東アジア諸国との国際関係、日米関係を考える上で、国内外からさまざまな課題が提示されています。

戦後レジームの観念を支えるのは、基本的人権の尊重、国民主権、そして第9条の平和主義という日本国憲法の三本柱です。冷戦終結後、近年では特に戦後レジームに異議を唱える動きが強まり、ナショナリズムが台頭しています。こうした動きは、中国や韓国との関係悪化、日米同盟の破綻につながるのではないかとされ、アメリカの政府官僚・有識者たちの不安を呼び起こしています。

2003年6月、韓国の盧武鉉大統領が来日中に、有事法制が成立しました。記者会見で大統領が語ったのは「法案自体を問題視するよりは、日本が北東アジアの平和においてどのような役割を果たしていくか、周辺国から信頼されていくことが重要」という考えです。まだ解決されていない歴史問題、外交問題があることを認識し、日本がどのような方向に向かっていくのかをよく考えることが必要です。アジアの人々にとって憲法第9条は象徴であり、過去のような戦争を二度と起こさないという証明であるということを忘れてはいけません。「言語を通して世界の平和を」のモットーの下で学んだ皆さんが、それぞれのやり方で和解に貢献することを期待しています。

主催：京都外国語大学 国際部
共催：フロリダ州立大学
The Institute on World War II and the Human Experience
京都外国語大学 国際言語平和研究所、国際教養学科、英米語学科
後援：読売新聞大阪本社



京都外国語大学
Kyoto University of Foreign Studies
京都外国語短期大学
Kyoto Junior College of Foreign Languages

［入試センター］ 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 TEL 075-322-6035 ［Website］www.kufs.ac.jp ［E-mail］nyushi@kufs.ac.jp

2018年4月 誕生！ 国際貢献学部※1 ○グローバルスタディーズ学科 ○グローバル観光学科
外国語学部 ○英米語学科 ○スペイン語学科 ○フランス語学科 ○ドイツ語学科 ○ブラジルポルトガル語学科 ○中国語学科 ○日本語学科 ○イタリア語学科 ○国際教養学科※2

※1）2018年4月開設予定（設置認可申請中）内容・名称は予定です。 ※2）外国語学部国際教養学科は学生募集を停止し、国際貢献学部グローバルスタディーズ学科に移行します。（予定）